

編 集 後 記

雪氷化学分科会が発足して 10 年になります。雪氷化学分科会は、雪や氷の化学的側面（イオン・化学成分、同位体組成、生物、ダストなど）の研究に興味を持つ会員の集まりです。

以前は、雪や氷に含まれる化学成分の分析は大変な手間がかかり、また高い分析技術を要するものでした。1969 年の *Geochimica et Cosmochimica Acta* に発表された M. Murozumi らの論文では、極域の雪に含まれる海塩成分を測るために 3.5 kg 近くの雪が必要でした。3.5 kg の雪を融解・再凍結を繰り返しながら化学成分を濃縮し原子吸光光度計で測定していました。どのように測ったかということよりも、誰が測ったかということが分析精度にとって重要な時代でした。

私が雪氷の研究に参加した頃は、既に分析機器の格段の進歩によって汎用性が高まり、化学分析は特別な人だけのものではなくなっていました。特別な分析操作をすることなく 1 ml の試料で極域の雪の化学成分を何種類も同時に測ることができます。当然のことですが、液体の分析ができることと、雪氷の化学解析ができることは違います。若者だった（当時は…）私は、

雪氷試料をどうやって液体にしたらいいのか、どうやって積雪から採取するのかを知らないこともさることながら、積雪層位を知らませんでした。恥ずかしい話なのですが、初めて積雪の断面を見たのはスバルパール諸島の氷帽の上でした。そこで、初めて積雪には構造があることや雪の種類を見ました。発足したばかりの雪氷化学分科会には、地球化学や分析化学の知識や経験はあるが、積雪断面観測をしっかり学んだことのない若者（当時は…）が幾人かいました。

そんな若者たち（当時は…）のとまどいと、それを見て「なんとかせねば」と一肌脱いで頂いた諸先輩の心意気が原動力となり、「実際の雪を前に講習会をやろう！」と雪氷化学分科会が主催の『雪合宿』が始まりました。乗鞍で始まり、母子里、立山室堂、蔵王、新潟清津峡、八甲田、大雪と続いていきました。最初の頃は、一日中雪を掘った夜も遅くまで語り合ったものなのですが、ここのところはあっという間に床についてしまいます。気づくともう若者ではないのでした。先輩から頂いた恩恵を次世代に返すときになりました。

（的場澄人）